

## 【読み原稿】

本日は、「かしこい暮らしをめざす長岡京市民大学第3回講座」にご参加いただきまして、ありがとうございます。わたしは、今回のテーマ「香を楽しむ」を担当させていただき、岡本明子と申します。長岡京市栗生、光明寺の隣に在る京都西山短期大学に勤務して40年あまりになります。また、昨年からの「長岡京市民大学」の第1回講師をされた西村日出男先生の紹介で長岡第十小学校の「すくすくキッズテン」におきまして「聞香教室」を担当しております。

さて、本日のテーマですが、先に15分ほどお話をさせていただき、そして香りを体験していただきます。

どうよまれましたでしょうか？「かおりを楽しむ」でしょうか？あるいは「こうを楽しむ」でしょうか？正解は両方です。と言いますのも、まず「香（こう）」について少しお話をさせていただいた後、実際に香木の「香（かおり）」を楽しんでいただきたと思っているからです。

最初に香りを鑑賞するときには、「匂う」あるいは「嗅ぐ」という言葉は使いません。「聞く」と表現します。この後、度々「聞く」という言葉が出てきます。そして、香を聞くことを「聞香」（もんこう）といいます。

香はインドの塗香が起源といわれています。そして西へはエジプトを經由して香水の文化となります。東へは仏教と共に、中国を経て6世紀に日本へと渡って来ました。焚香いわゆるお焼香の文化です。仏教が日本に伝来した奈良時代の香は、主に仏教儀礼に用いられ、仏前を浄め、邪気を祓う供香（くこう）として用いられ、宗教的な意味合いが強いものでした。『日本書紀』には、595年（飛鳥時代）に淡路島に香木が漂着し、島人が知らずに薪と一緒にかまどにくべたら良い香りがただよったため、この香木を朝廷に献上したと書かれています。

常に仏教と共にあった香も、平安時代になると供香だけでなく、香料を複雑に練り合わせ、香気を楽しむ「薫物」が貴族の生活の中でさかんに使われるようになります。貴族たちは自ら調合した薫物を炭火でくゆらせ、部屋や衣服への「移香」を楽しみました。

その様子は『源氏物語』等に記されています。

室町時代には、香道という芸道として確立します。銀閣寺を舞台とした、いわゆ

る東山文化のなかで、茶の湯や生け花、能などとともに誕生したのが香道のルーツです。そのリーダーが足利八代将軍義政であり、それを取り巻く文化人たちに、古今伝授を司った三条西実隆、連歌の飯尾宗祇、近衆の志野宗信など そうそうたる人物がいたのです。そのなかで、香木の種類と焚香の作法など、香道として体系化したのが志野宗信であり、当志野流の流祖です。さらに二代宗温、三代省巴をへて、志野流香道は現在の蜂谷家へと受け継がれます

江戸時代に入り、現代にみられる香作法の基盤がほぼ完成します。世情の安定とともに、香道は全国諸大名のたしなみの一つとして取り入れられ、武家社会のなかに浸透していきます。家元制度が確立されたのもこの時期です。元禄の爛熟期をへて十八世紀になると、香人口は急激に増大。特別な階層だけでなく武士、町人、さらには一部農民層まで広まり、最大の隆盛期を迎えます。そして、十八世紀初頭、文化文政期には 女性層にも広がり、料理、裁縫、茶道などとならび、身につけるべき 教養の一つにまでなるのです。

香の歴史を簡単に述べましたが、次に香木の種類についてお話させていただきます。香木には、二種類あります。一つは旃檀（せんたん）・白檀などの檀香（だんこう）です。旃檀とは「旃檀は双葉より芳し」の旃檀です。栽培可能な香木です。そして、もう一種類、伽羅（きゃら）などの沈水香があります。沈水香は、沈香ともいいますが、文字どおり水に沈む香木です。白檀などとは異なり、栽培することはできません。そして香木と言っても、木そのものが芳香を放つものではありません。インドや東南アジアの熱帯雨林に分布する樹木が自然に枯れたり、バクテリアによって朽ちたある種の木が長期間、土の中に埋もれ、樹脂が凝結したものが香木となります。そのため、香木の採集はほとんど偶然にたよるしか他に方法はありません。しかも、樹齢数十年を経た老木でないと、沈着が発生しないといわれています。後程、この沈水香を聞いていただきます。

そして、それぞれ異なる香りを持つ香木を体系的に分類したのが「六国五味」（りっこくごみ）です。六国は香木の種類を 6 種類に分け、五味とは 5 つの味です。六国とは、伽羅（きゃら）・羅国（らくく）・真南賀（まなか）・真南蛮（まなばん）・寸門多羅（すもんたら）・佐曾羅（さそら）の 6 種類です。伽羅は「その様にやさしく位ありて、苦を立るを上品とす。自然とたをやかにして優美なり。たとえば宮人のごとし。」羅国は「自然と匂いするどなり、白檀の匂いありて多くは苦を主

る。たとえば武士のごとし。」 真那賀は「匂い軽く艶なり、早く香のうするを上品とす。香に曲ありて、たとえば女のうち恨みたるが如し。」 真南蛮「味甘を主るもの多し、ぎん葉に油多くいづること真南蛮の品は伽羅をはじめその余の列より誠にいやしく、たとえば百姓のごとし。」 寸門多羅「前後に自然と酸きことを主る、伽羅にまがふ。然れども位薄くして賤しき也。其品たとえば地下人の衣冠を着たるのごとし。」 佐曾羅は「匂ひ冷やかにして酸し、上品はたき出し伽羅にまがふ也。自然に軽く余香に替れり、其品たとえば僧のごとし。」

また、六国を六歌仙に喩えることもあります。伽羅を「僧正遍昭」、羅国を「在原業平」、真南賀を「小野小町」真南蛮を「大伴黒主」寸門多羅を「文屋康秀」佐曾羅を喜撰法師の6人です。

五味は、甘（あまい）・苦（にがい）・辛（からい）・酸（すっぱい）・鹹（しおからい）の5つの味によって香りの相違を知るものです。しかし甘みというのは、どんな甘さでも構わないというわけではありません。「甘い」と表現しても、各人各様そのときに意図している甘さは異なります。ですから、甘は蜂蜜の甘さ。苦は柑橘類の皮を火にくべたときの渋み、苦み。辛は丁香（クローブ）の辛み。酸は梅干しの酸味。鹹は海藻を火にくべたときの感じ。

先程、伽羅は苦いと申しましたが、ひとつの香木でも、味が一つということはありません。いくつもの味を兼ねるものが多く、五味の強弱や組み合わせにより、無限の香りになり、香木が違えば同じ香りのものは二つとありません。

では、実際に香を聞いていただきます。六国を伽羅・羅国・真南賀・真南蛮・寸門多羅・佐曾羅の順に出します。その後、少しゲームをいてみたいとおもいます。香をたくにはさまざまな形式がありますがその基本は、何といたっても香木に対する尊敬の念にほかなりません。この希少な天然香木を敬い、大切に扱う気持ちが原点です。香をたくという、一見なんでもないように見える好意にも、実は深い思慮と精神が秘められているのです。